

# 九州天皇家論

## 2章 仁徳天皇

### 小倉の恋の物語

# “青丹よし”は錦秋

古事記から仁徳天皇と太后石之日賣命の物語を読んで見よう。

此れより後時、太后豊楽(とよあかり)したまはむと為て、御綱柏(みつながしは)を採りに、木國に幸行でましし間に、天皇、八田若郎女と婚(まぐは)ひしたまひき。是に太后、御綱柏を御船に積み盈(み)てて、還り幸(い)でます時、水取司(もひとりのつかさ)に駈使(つか)はえし吉備国の児嶋の仕丁(よぼろ)、是れ己が國に退(まか)るに、難波の大海の大渡に、後(おく)れたる倉人女(くらびとめ)の船に遇ひき。乃ち語りて云ひしく、「天皇は、此日(このごろ)八田若郎女と婚ひしたまひて、昼夜戯れ遊びますを、若し太后は此の事聞し看(め)さねかも、静かに遊び幸行です。」といひき。爾に其の倉人女、此の語る言(こと)を聞きて、即ち御船に追ひ近づきて、状(ありさま)を具(つぶ)さに、仕丁の言の如く白しき。是に太后大(いた)く恨み怒りまして、其の御船に載せし御綱柏は、悉に海に投げ棄(う)てたまひき。故、其地を號(なづ)けて御津前(みつのさき)と謂う。

仁徳天皇は「吉備」の「黒比賣」に続いて「八田若郎女」を宮に入れて昼夜遊ぶ。「木國」に御綱柏を採りに行っていた後は関門海峡まで帰ってきた時に是を聞き、怒り狂い、御綱柏を海に投げ捨てて、仁徳の高津の宮には帰らず、堀江を遡って「山代」に向かう。そこで詠ったのが次の歌である。

つぎねふ 山代河を 河上り 我が上れば 河の邊に 生(お)ひ立てる 鳥草樹(さしぶ)を 鳥草樹の木其が下に 生ひ立てる 葉広 五百箇眞椿(ゆつまつばき) 其が花の 照り坐(いま)し 其が葉の 廣り坐すは 大君ろかも

この一見“冷静”な歌の真意は何であろう。まさか、仁徳を許す気持ちになったのではあるまい。では仁徳が恋しくなったのであろうか。

その花のように、お顔も照り輝いていらっしゃる  
その葉のように、寛やかにゆったりとしていらっしゃる

(古事記仁徳頭注)

このように頭注は解説している。皇后は怒り心頭である。仁徳を“褒めた”なんてことはないであろう。察するにこういう意趣ではないか。

本当に腹が立つわ。何よ。私がいなくて間に八田若郎女を宮に入れるなんて。もう愛想がつかたわ。実家に帰ります。高津の宮には帰ってやるものですか。・・・あら、あら、河のほとり、「鳥草樹(さしぶ)」の木の下に椿があるわ。

・・・・・・そう、そうね、あの椿のあかい花のように、顔を赤らめて、あの葉のようにゆったりとしているのは、まるで私が怒って河を上って来た時、顔を紅潮させ、為す術もなく突っ立て、茫然と私を見送っていた天皇にそっくりだわ。

鳥草樹（さしぶ）  
小小んといわれる



通りすがりに椿に向かって、「イーダ！」とでも言ったであろうか。さぞかし溜飲を下げたことでしょう。それにしても皇后のこの強さはどうであろう。そして、その後、歌ったのが「青丹よし 奈良を過ぎ」の歌である。

即ち山代より廻りて、那良（なら）の山口に到り坐して歌曰ひたまひしく

つぎねふ 山代河を 宮上り 我が上れば 青丹よし 奈良を過ぎ 小楯 倭を過ぎ 我が  
見が欲し国は 葛城高宮 吾家のあたり

とうたひたまひき。如此（かく）歌ひて還りたまひて 暫し筒木の韓人、名は奴理能美の家に入り坐しき。

「宮のぼり」の意味は「難波の宮を通り過ぎて」と頭注1（日本文学大系「古事記」）は説明する。この意味でもそんなに問題はないといえるが、少しまどろかしい。この歌の文脈から云えば、ここは「宮に向かってのぼる」という意味となる。その「宮」とは仁徳の「高津宮」ではなく、実家の「葛城高宮」のことであろう。

嶺を経て山代河を「葛城の高宮」を目指して上って行く。私が上っていけば・・・と歌う。次の「青丹よし」、この言葉はあまりにも有名である。奈良の枕詞である。

先日（2010年9月）、奈良薬師寺にお参りする機会がありました。ちょうどその時、薬師寺のお坊さんの講話を聞くことができました。

ご本尊は薬師如来です。私たちの身と心の病気を救ってくださる仏さまです。いわばお医者様です。右の脇侍は日光菩薩、左に月光菩薩がいらしゃいます。日光菩薩、月光菩薩は今で云う看護師です。皆さんが病気になるとき、いつか分かりませんね。昼間に病気になるとは限りません。その為このふたりの菩薩様は二十四時間体制で看護につとめられます。昼間は日光菩薩、夜は月光菩薩様が夜勤をされているのであります。

このような軽妙な語り口でお話をされました。薬師寺の東塔はこれまた有名ですが、新しく建造された西塔もあでやかに輝いていました。この二つの塔の写真を頭上に掲げながら、

奈良は「青丹よし 寧楽の京師は 咲く花の 薫うがごとく 今盛りなり」と歌われてきました。青とは緑、丹は赤ですね。この薬師寺の金堂も緑と赤の色で塗ってあります。青丹よしとはこのように奈良のお寺の建物の色をいったのでしょうか。

自称二十三歳の若い修行僧の講話でした。私たち一同、微笑してなるほどと頷いて聴いたものです。

## 「青丹よし」とは「紅葉が美しい」

「青」とはどんな色を云ったのか。古語辞典では「黄色がかった緑」である。「丹」とは赤である。青は黄緑、丹は赤である。皇后は「青丹よし 奈良を過ぎ」と詠んでいる。この「奈良」とは「那羅山」である。地の文に「那良(なら)の山口に到り」とある。皇后は「那羅山」を輿に乗って越えて行ったのであろう。その時の実景、目に映る現実を、「青丹よし」と詠んだ。従ってこの「青丹」は実際の色、現実の色である。

この時、季節は陰暦秋九月である。「那羅山」は黄に赤に染まっていたのではないだろうか。紅葉である。紅葉の美しい「那羅山」を上り、越えて行く中で、その美しさに思わず、「青丹よし」と詠ったのである。「青丹よし」の実体は山である。「那羅」ではない。「那羅」は山の名前である。「青丹よし」と詠われた歌はほかにもある。

万葉集17番 額田王の近江國に下りし時に作る歌、井戸王すなわち和する歌

味酒 三輪の山 あおによし 奈良の山の 山の際に い隠るまで 道の隈 い積もるまでに  
つばらにも 見つつ行かむを しばしばも 見放けむ山を 情なく 雲の 隠さふべしや

万葉集29番 近江の荒れたる都を過ぐる時、柿本朝臣人麿の作る歌

玉櫛 畝火の山の 樞原の 日知の御代ゆ 生れましし 神のことごと 樗の木の いやつぎ  
つぎに 天の下 知らしめしを 天にみつ 大和を置きて あをによし 奈良山(平山)を越え  
いかさまに 思ほしめせか 天離る 夷にはあれど 石走る 淡海の國の 楽浪の 大津の宮に  
天の下 知らしめしけむ 天皇の 神の尊の 大宮は 此処と聞けども 大殿は 此処と言へども  
春草の 繁く生ひたる 霞立ち 春日の霧れる ももしきの 大宮處 見れば悲しも

この二つの歌でも「青丹よし」は「奈良山」を修飾する。「青丹よし」は山にかかる修飾語である。この修飾関係が原義である。「青・丹」は山の色あいの表現である。仁徳皇后の歌の「奈良」、井戸王の歌の「奈良」、人麿の歌の「奈良(平)山」は全て山である。これらの歌に歌われた「奈良」とは全て山の名前である。「青丹よし」とは山にかかる修飾語である。

では「よし」とは何か。この「よし」は現代表現の「良し」とは少し異なる。善悪の意味ではない。また「よし、解った」の「諾」の意味でもない。紅葉山の形容であるから「美しい」「美事だ」と同義であろう。

「青丹よし 奈良を過ぎ」は「紅葉の美しい 奈良の山を過ぎて」という意味である。後世、「青丹よし」は「寧楽」に係る枕詞と変質した。この「寧楽」はもはや山ではない。都である。山から都へと係る対象が変化した結果、「青丹」は紅葉の色の表現であることを捨て、「黄緑と赤」という唯の色合いの表現になり、枕詞となってしまった。古事記は仁徳皇后の心理を読んで物語りを綴る。

もし、今、あなたが、自分の夫か、または恋人と喧嘩をして憤懣やるかたなく、山へ登っていったとしましよ。季節は晩秋、山は紅葉で真っ赤に染まっている。あなたはその中を歩いて行く。

「なんと美しいことか！」

あなたの心はきっと癒されるちがいありません。

「まあ、なんてささいなことで喧嘩をしてしまったことでしょう。怒りに駆られて家を飛び出してしまったけれど……」

と、帰心が生ずるのではないのでしょうか。

皇后もきっと同じ思いを抱いたであろう。

私が見たい、実家の葛城の高宮は、小盾、倭を過ぎて、その向こうにある……でも、我が家に帰っても、もはや、そこは別の世界……。

そして、皇后は「山代」まで引返して、そこに宮を構えた、とこのように書き留めている。古事記作家は見事な“心理分析医”、見事な“ストーリーテラー”である。